

全裸で無人島！

男友達のような関係の
ボーイッシュ幼馴染



海の匂い……
波の音——
目に差し込む強い日光

ザザザ……







……ばあゝかッ！
俺たちしかいねえってのに
なに恥ずかしがってんだよッ

ここじゃあ
俺たち、二人きり
……だろ？

幼馴染のツバキは男勝りな口調で
僕のことをからかう――
僕らは無人島に遊びに来ていた
気にするような人目はない――
だから二人が全裸でいても
咎められるようなことはなかった

だからと言って青空の下で
一糸まとわぬ姿でいるのは
さすがに――





ここでは外で裸になつて
思いつきハメを外すんだろッ
いい加減、覚悟を決めろよッ
男らしくねえぞッ!!!

ほれほれッ

パッ
パッ
パッ

パッ
パッ
パッ

ツバキはふざけながら水を掛けてきた
僕はなんとか男らしく抗議をする

ち……ちげーしッ！
別に恥ずかしがってなんか
………ねえよッ！

ほれッ

ツバキが堂々としすぎなんだよ
羞恥心も微塵もないのかよッ！





こんな誰もいない無人島に来て
全裸で過ごそうなんて変態だぜ
羞恥心なんて置いてきたってのッ

ほらッ！俺たち！
変態仲間だろッ！

変態仲間だ……なんて
まったくもって心外だ

心外だが……しかし……
太陽の光に晒されたツバキの裸体は
やたら目に眩しく……

ゴブリッ……



そもそも言い出しっぺは
ツバキのほうだろ？
変態はツバキだけだって
僕は付き合っただけ

なにおうツ！そんなこと言っ
てフル勃起してんじゃねえかよ
お天道様の下でピンビンの変態ツ！

そんなこと言っただけで
どうせツバキのほうこそ
マン汁だだ漏れのくせに！



わかるかよお！
まだ濡れてませえーん

いいえ濡れてますう
お前はいつもすぐに
マン汁ヌレヌレになるの
僕は知ってますう



まったくもって全てがいつものやりとりだ
僕らが全裸であることを除いて——
そもそも、こんな無人島に来ようだなんて
——きっかけは数週間前のことだった







ツバキは僕の部屋で裸になり
急かすように股を開いていた
僕にとってツバキは幼馴染だが
小さい頃からの男勝りな性格もあって
まるで男友達のような関係だった

そしていつからだろう——
僕たちは気軽に遊びにさそうように
自分たちの持て余した性欲を
一緒に済ますような間柄になっていた





ほれほれッ
はやくう!

イカせて
くれやがれえ

まったくツバキのやつは—

僕はツバキのマ○コに指を入れると
待ってました！とばかりに声上がる

ンンッ……
きたきたあ

もう、ずっとヌレヌレで
待ちきれねえよッ

ツバキは本当にスケベだよなあ
僕がイカせてあげないと
万年発情期なんじゃないか？

性行為をしながら軽口を叩くのも
はやいものやりとりである

なにおおッ！



はあ……んッ
きもちいい……
アアッ……

ほらあ……そこッ！
んんッ……あ……
ああ……んッ！

な……なあ

僕が手マンを始めると喘ぎ始めるツバキ
……そして突然、僕に語りかけてきた



たまにはさ…ンッ
いつもと違うことお
してみたくないか？

なんだろう……？
僕のテクじゃ不満か？

いつもと違うこと……？
例えば……？

ほらあ……
外とかあ

外おツ！

外——青姦？ 露出プレイ？
こいつは僕に何をやらせるつもりなんだ？



ほらあ…夏休みにさあ
無人島に行こうぜ
……ってンン…

無人島って…
ああ…あそのの

そう……そこで
ずっと全裸でさあ
開放的な感じでさあ

家から窓を覗くと海が見える
その先には地元の人間に知られてる
無人島があった――

僕の叔父さんが運営していた
クリエーション施設が閉館してから
そのカヌーを勝手に拝借することで
無人島に行くこともできるだろう

たしかに別荘地でもないあの無人島なら
人目を気にせずに全裸になれるだろう





だから一日中……
裸でさあ……

一日中ッ！

思わず手が止まった——



アアッ……ちよつとッ
手を止めるなよバカッ

いま……
いいところ
なんだから……

ああ……
ごめん……

思わぬクリームが入った……
たくッ……こいつ……う
仕方なく手マンを再開すると
ツバキはまた喘ぎはじめた



ああ……ンツ
そうツ……ソコお！
キモチ……イイツ！

もつとソコお！
はやくイカせろよおツ！

たくツ……
この話は
またあとでな

あ……ああツ

手マンと夏休みの予定……
並行してするような話でもない
僕はとりあえず手マンに専念する



き……きもちいいッ
い……イクうう……

アアッン！ はあ……
アッアッアッ！
いつもみたいにいいッ
ソコおツ！ もつとお！

ほらあもつとツやれよお！
そこお！ い……イクう……
も……もつとおおツ

ッ
ッ
ッ

ッ
ッ
ッ

ッ
ッ
ッ

ッ
ッ
ッ



い……イクう！
いっちゃ……うううッ
アアア……ッああ！

——ということがあった
僕は結局この手マンでイカせたあと
夏休みに無人島に行くという話に
ツバキに強引に合意をさせられた

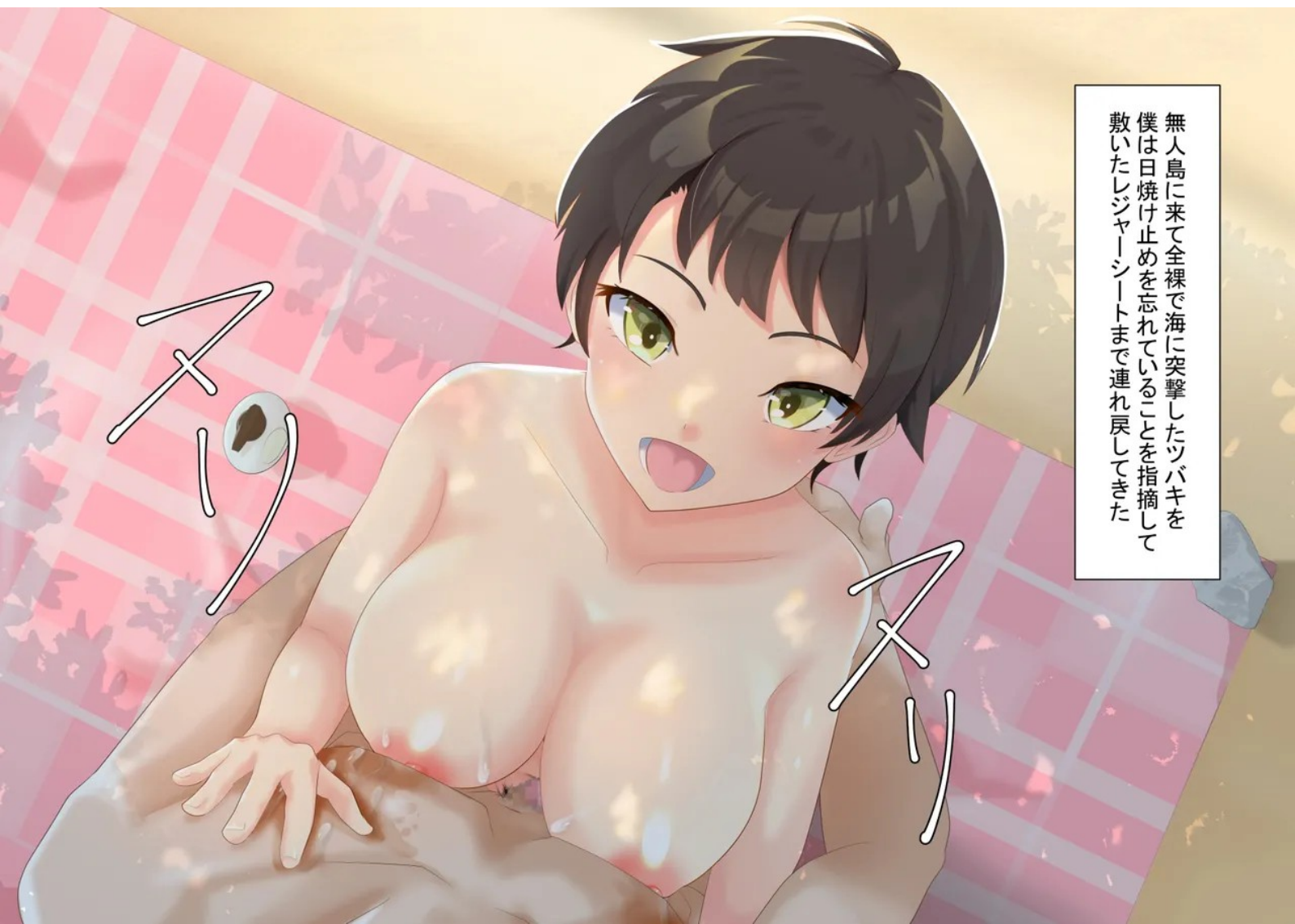
無人島で全裸計画——
そのふざけたツバキの計画は
無事に夏休み初週に決行された







無人島に来て全裸で海に突撃したツバキを
僕は日焼け止めを忘れていることを指摘して
敷いたレジャーシートまで連れ戻してきた





俺の美肌が
焼けちまうぜ

日焼け止めは
しっかり塗らないとなあ

——まったくよく言うよ…

いやいや……準備もせずに
開幕全裸で海に突っ込んだのは
ツバキだろツ！

ヌハハハッ！
若気の至りってやつだな



調子の良いことばかり言っていると笑いながら
身体を擦りつけて日焼け止めを塗るツバキ
やることなすこと性的なことをしようという
今回の僕らの冒険こそ若気の至りに他ならない

僕たちは股間を重点的に動かした
日焼け止めのヌメとした心地よさと
ツバキの陰毛が擦れてペニスを刺激する感覚
これじゃあまるで……



なんかこれッ……
ローションプレイ？
……ってやつみたいだな

ツバキは僕が思っていたことを口にした
僕たちは長い付き合いなだけあって
考えがシンクロすることは珍しくなかった





だよなあ…これじゃあまるで
ツバキがソープの人みたいだな

行ったことないけど…

はあ……おまえッ
じゃあ金払え！
金ええッ！

無人島にお金なんか
持ってきてません……

それにしても……
なんか股間に固いものが
当たってるんですけどお？

——うう……こいつ……
男勝りとはいえツバキの身体は
女の柔らかさそのものだ

——うう……ローションと生肌の感覚
そして、僕の股間に擦りつけられる
ツバキの陰毛がほどよい刺激になっていて
アソコはギンギンになっていた——

う……うるせえ……
べつにツバキのせいじゃ
ないやいッ……



じゃあいったいなんのせいで
こんなにギンギンになってんだあ？
海や空に欲情してるのかあ？

うりうりいゝ

おいおいゝ
もっと固くなってるぜえ
何に欲情してるのかなあゝ

ちょっ……
やめ……ッ

ツバキはいたずらに股間の擦り方を強くする
まるで僕のアソコから何かを出すことを
期待するような腰つきに声が震える――

くゝゝゝ
いゝゝゝ
ッ

何にボツキしてるんだあ
ほらほら答えてみるよお

俺の身体に欲情してるの
股間の固さが証明してるぜ
白状しろよお

おらおら
くらえッ!
うりうりいッ!

うっッ—そんなに刺激されるとッ





抵抗も力及ばずに——
ツバキに射精させられてしまった

それでえ？何に欲情して
イっちゃったんだ？

すいません……
ツバキさんです





僕はとうとう白状した――

だろーろお！









ほれほれえ
見て見てッ
尻の穴ッ！

お天道様に
アナル見せる日が
来るとはなあゝ

行儀悪くツバキはアナルを見せつける
もしかしたらこいつは少々――
露出癖があるのかもしれない

おまえそんなことばっか……
ちよつと癖になってるんじゃない？
ここから帰ってもそういうことを
するんじゃないか？

……ばあかッ！
おまえの前でした
こんなことやらねーよ





でもすごくね？
真昼間の外でアナル広げるって
こんな開放的な気分になれること
人生でめったにないぜツ！

たしかにそうだけど……
そこまで開放的にならなくて
いいかなあ……

なんだよおツ
ハメを外して
なんぼだろおツ！

……だとしても
アナルは広げないかな



たくツ——
ハメの外し方を
教えてやるかッ
見てろよおッ!

ん？



ツン……

——おっしー



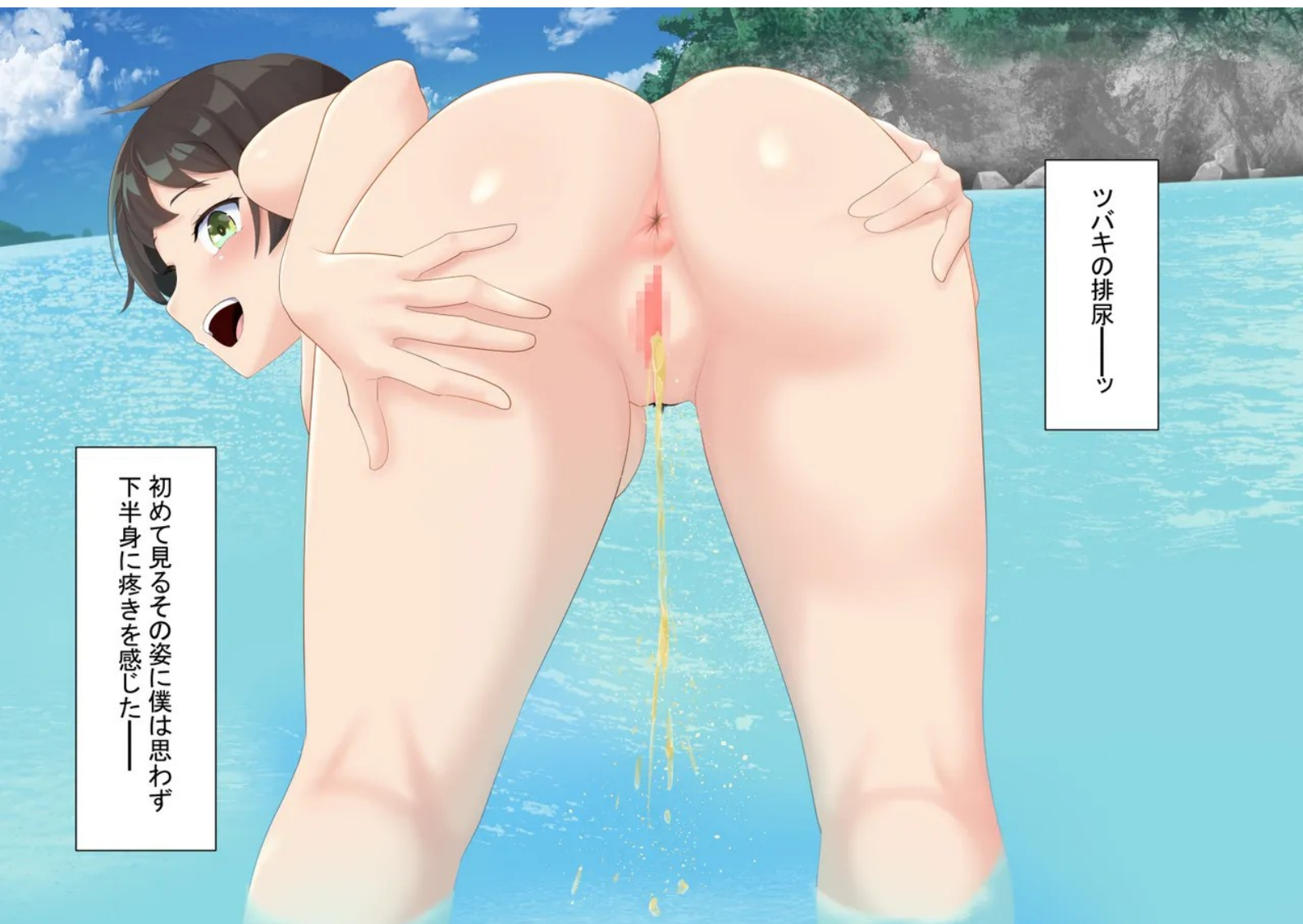
ほらほらあゝ
ションベンッ！

—マジかよ…ッ

ここまでやるんだよッ
だれもいねえんだから

ツバキの排尿——ッ

初めて見るその姿に僕は思わず
下半身に疼きを感じた——





おいおい硬くなってんぞお
シヨンペンで興奮するのか？

ちッ…違うわいッ

変態ッ！



じゃあさ……
ハメ外すついでに……

——
う……？







昔からさあ……外でおもいつきり
マスカいてみたかったんだあ

ツバキは僕の前で大腿を開いて
自分の股間を弄り始めた——
そして僕もツバキと向き合って
自分のナニをシゴく——



お互いをオカズにしてオナニーしてみよう
……というのがツバキのアイデアであった
たしかに僕も外にいるときにムラっとして
ここでシコつたら気持ちいいだろうな……と
考えてみたこともあった——
この機会に実際にやってみようというのも
思い切りのいいツバキらしい考えだ

はあ……はあ……ン
ムラつときたら
すぐに抜かねえとな
……アッ

……んッ

ンンッ……まさか外で
シコる日が来るとは……

抜いとけ抜いとけッ
ほらッ俺の身体を好きに
オカズにしていぞッ

まあオカズにしろって言うなら
オカズにするけどさあ……





あ……ンッ……なあ
おまえもさあ……ンッ
だいぶカラダ変わったよな

……ん？

んんッ

子供の頃はもつと……アッ
ひよろつとしてたというか
だいぶ男らしくなったじゃねえか



そう……？
たしかに筋肉ついたかも

昔は俺のほうが
力が強かっただろ？
アア……ンッ

お前もだいぶ……ン
オカズに使えるような
アツ……カラダになった
……じゃねえか

たしかに子供の頃に比べて筋肉はついたかもしれない
——そして、ツバキは僕のほうをチラチラ見ながら
股間を弄る手の動きを激しくしていた……………

ああッ……ンッ
胸板も……だいぶ
……すごい……ン！

あッ……アアッ
ンン……はあはあ
アソコも……ギンギン
……硬そう……アアッ！



ツバキは僕の身体をオカズにして
自分の股間を弄る手の勢いを増していく
たしかに僕は成長して子供の頃に比べて
だいぶ筋肉質に成長していた——
しかし、ここまで熱心にオカズにされているのが
自分の身体だと思ふと僕も少し興奮してきた

アッアアアンツ
ハア…はあ……ン
アッ！ すごい…

抱いて……そのカラダで…
ンン…ッアアアッ！
あああ……ンンンツ！

く
り

く
り



ツバキッ! もう出るさ
ぶっかけるぞッ!

お...おおうッ
来いよ...アッ!
俺もお! イクう...



僕の精液がツバキを汚したー

はあ…

はあ…

はあ…











あッ……アアッン！
はあ……もつとお
強くンンッ！

はあ……アアアッン！
お願いもつとお！
そう……ンンンッ！

／P、／
／P、／
／P、／

／P、／
／P、／

僕らはお互いをオカズにして抜いたあと
まだ収まらずに勢いのままに絡み合った

ここは無人島——場所はもちろん太陽の下、海の上
大自然のド真ん中でツバギに腰を打ちつける





イイツ…ぞ！
いつもより…ンッ
すごクイイ！

ツバキい……ッ
今日はいつもより
締まってるよッ！

アッ
ッ
ッ
ッ



アアッ……こんなセックス……
してみたかった……ンンッ！
すごい！気持ちよ……すぎるッ！

お腹の下が……
ジンジン……するう

おまえと二人っきりで……
誰にも邪魔されないの……
すごくイイッ……アア！



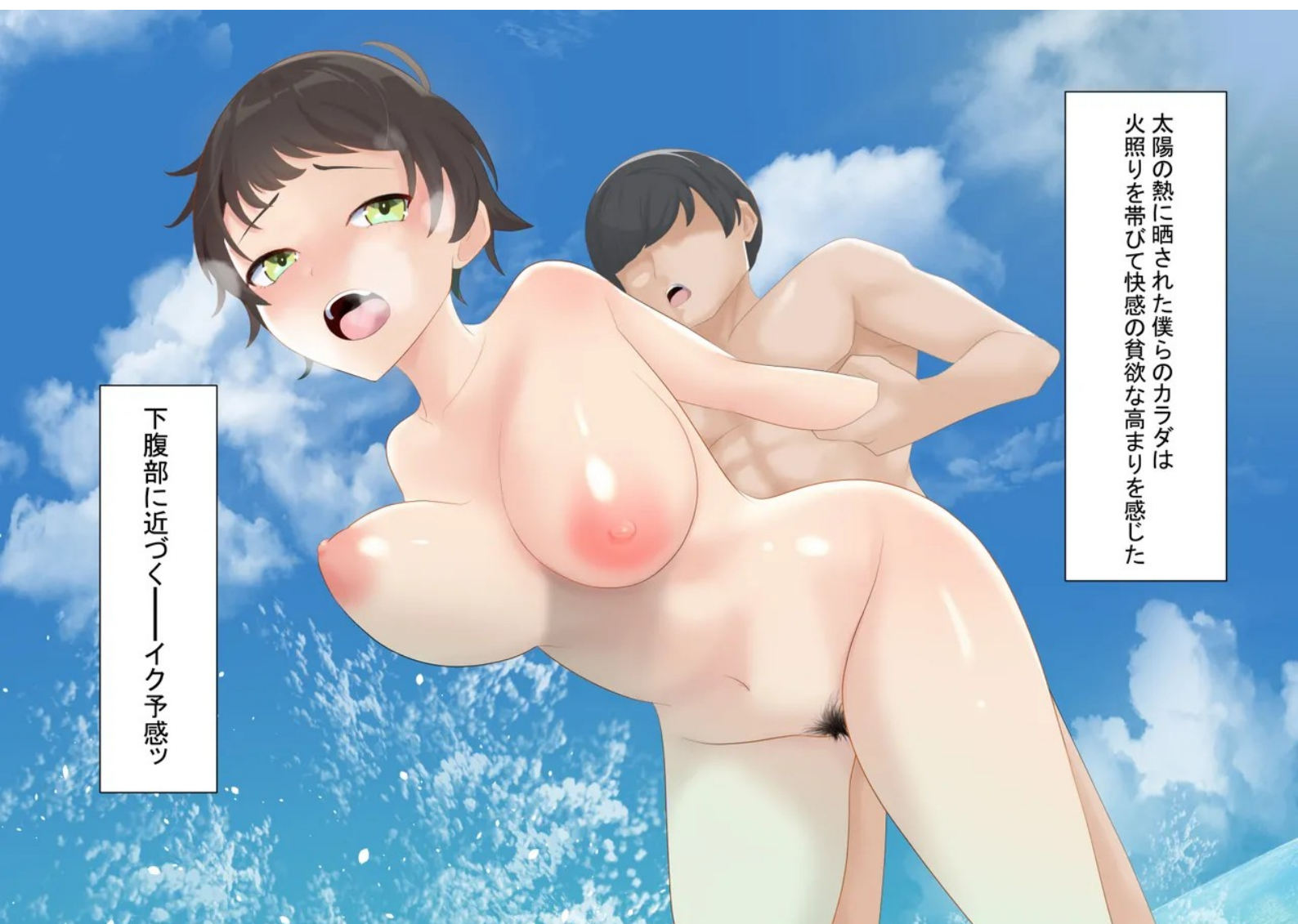
ツバキッ！
今日はとことんやろうッ！
僕の精子ッ全部ナカに出すぞ

アアッ！全部くれえ！
お前のお…ンンッ
金玉の中のやつ全部！



太陽の熱に晒された僕らのカラダは
火照りを帯びて快感の貧欲な高まりを感じた

下腹部に近づく——イク予感ッ





この射精はいつもと違う——
遥かな心地よさを残した

はあ……はあ……
……ふうう

……好き

……え？



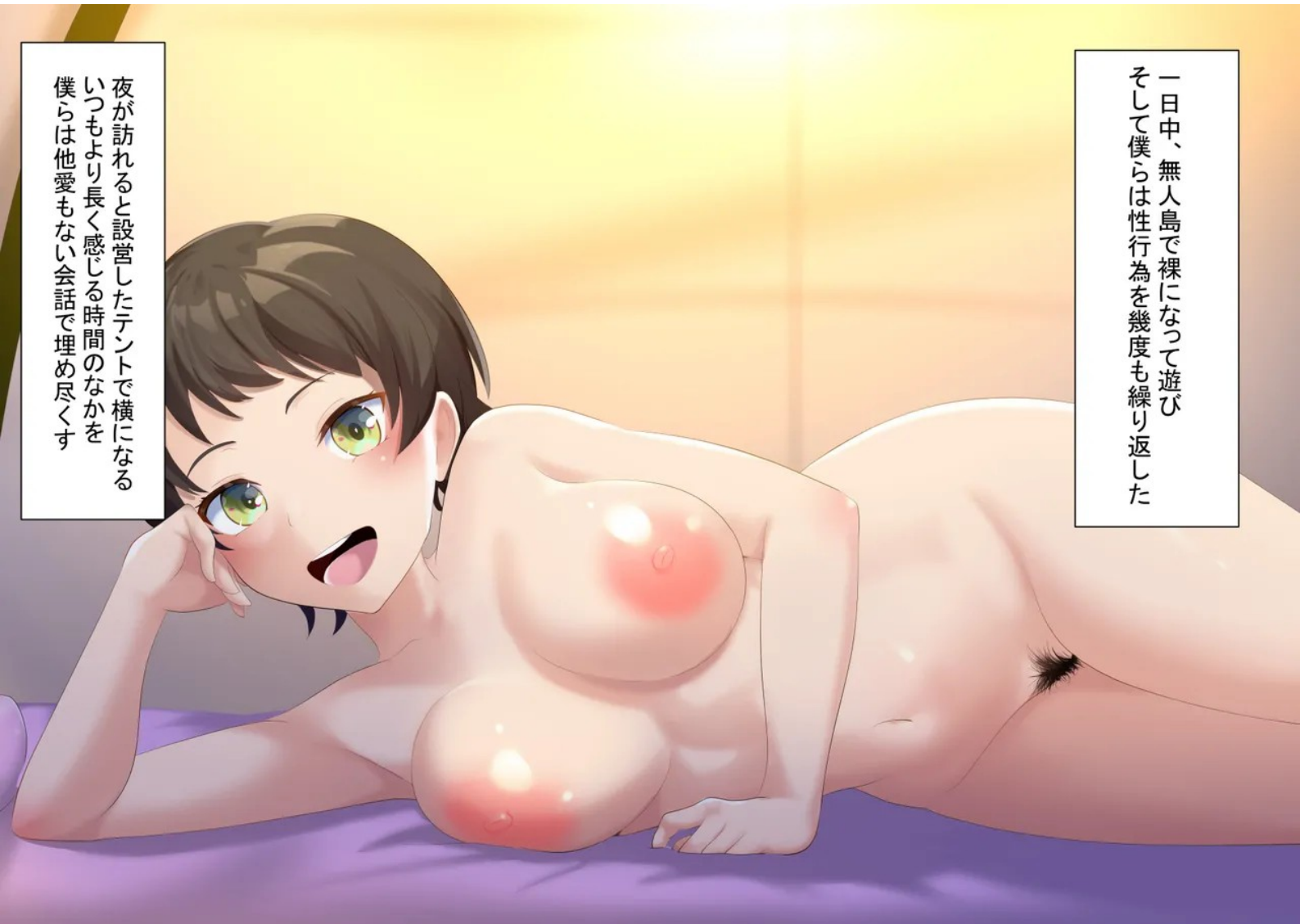






一日中、無人島で裸になって遊び
そして僕らは性行為を幾度も繰り返した

夜が訪れると設営したテントで横になる
いつもより長く感じる時間のなかを
僕らは他愛もない会話で埋め尽くす





今日は充実したなあ
まだお前の精子が
アソコにパンパンだぜえ

そう…こっちはマジで
一生分出したよお

アハハッ……
おまえ明日も
頼むぜえッ
まだ足んねえよ

持つかなあ……僕の精子……

う……うん……寝てる間に
頑張って精子量産するよ

おうよッ！
全部プチこんでくれな





なあ……

そういえばお前はさあ
将来のこととか考えてるか？

ほらあ…
結婚とか…
そういうの

ツバキは探るように話題を変えた
将来の話——こういう泊まりの場では
鉄板の話かもしれないけど……
それにしても結婚かあ……

難しいよ……さすがに
まだ考えたことないかなあ

ふうん……





結婚とかはまだ……
よくわからないけど
……でもさあ

……
ん？

僕らはたぶん……一生一緒に
いるんじゃないかな？

僕は昔から思っていた予感を
正直に言葉にした――





そ……
そうかあッ

アハハハッ
マジでウケるッ
ハハハハッ

なんだよお

ハハハハッ！
だなッ……
一緒だろうなッ

僕らの体液の匂いが充満したテントで
ツバキの嬉しそうな笑い声が響いた











寝る前に...もっ一回ッ
ほらあ...早くッ!

たくッ...
ツバキはほんと
好きだねえ...

しょうがないだろお
俺はまさに今ッ!
スッキリしたいんだから



アア……ンッ

僕は腰を勢いよく動かすと
ツバキは嬉しそうに喘ぐ――

そう……ソコお
一日の締めにい……
もう一回……イカ……せて

ほらツツバキ！
どうせならさあ
満足させてやるよッ



アアンッあッアアッ
ソコ…ソコッそこお！
もつとソコお突いてえッ！

うううう…ッン！
ソコが好きなお！
よく…分かってる…なッ！



アアンツ!
はあッああ

ツバキは…ツ本当に
僕のチンコが好きなんだなあ
ホラッ…ええいッ!

ああ…そうだよお
好きだよお前のチンコがなあ

僕のチンコを求められて
腰を動きをより激しくした

アッアッああん
そう……そこが好き
おまえのチンコもお

あとお……
お前のことがあ







好き……大好き
チンコも身体も
心も全部……

ずっと一緒にいてくれて
……好き

……ツバキ



お前のことが……好き









今までツバキとは性行為をする幼馴染という
曖昧な関係をずっと続けてきた——
男友達のような間柄だと思っていたけど
心のどこかでは引つかかるものはあった

だが改めて好きだと言われると
僕はもう一度ツバキを抱きたくなった



こんな夜空の下でなんて
ガラじゃねえけどさ……
ロマンチックだよな

ああ……
ツバキ……

……ほら
動くぞ

ツバキは腰を動かす——
熱を帯びたツバキの身体から
速まる鼓動の感触も伝わる

……んッ

はあ……んッ
どう……

気持ちいいか……？
はあ……はあ……アッ





気持ちいいよお……ツバキ
今日で一番……イイ……ッ

アアッ
……ンッ!

そうか……よかったッ
ンンンッ……はあ
俺もだよ……なあ



はあ……気持ちいいなあ……ッ！
アアッ>NN>NN>NNッ！

はあ……ふう……ン
うう………本当は
ずっと前から……さ

好き……
だったんだぞ

ツバキの気持ち——
僕も応えたいッ！

……んん

ツバキいッ！
僕もツバキのことがあ









愛してるよ……ツバキ
これからもたくさん…
抱くからな……

う……うんッ
嬉しいぜッ……

僕は呼吸を整えるのに精一杯だった
夜空の下……ツバキの体温を感じる
僕はただ無言で見つめ合う時間を
絶頂の後味を残したまま味わった――



海の匂い……
波の音——
目に差し込む強い日光

ザザザ……

無人島に来てから二日目――
僕はまた海水浴を楽しんでいた

ほらあッ
くらえッ！





逃がさねえぞッ
オラオラッ
なんてったって
おまえは一生……

ツバキは昨日よりも激しい猛攻で
僕に水を浴びせてくる——
僕はつい及び腰になって逃げる姿勢……

俺の相棒……
なんだからなッ！



なッ!

おわり_v